

アフリカと踊ろう!

2021年5月 NO.101

100号記念 企画座談会 アフリカチームの歩み その2

前号に引き続き座談会の続きです。座談会参加者紹介



今井高樹
現JVC代表



石川(下田) 朋子
元JVCスタッフ



栗田貴之
アフリカチーム



小河原房男
アフリカチーム



中川 透
アフリカチーム



中村俊哉
アフリカチーム
座談会でMC担当

中村：若い力で成し遂げた企画とか合宿の他にはどんなことやっていました？

栗田：自分が記憶に残っているというか、すごいしんどくて楽しかったなあっていうのはやっぱり勉強会ですね。その当時インターネットが無かったので、エチオピアって言っても、「なんじゃそりゃ」って所だったんですよね。勉強会しましょうと。ボランティアが順繰り発表やっていくんですけど、情報が本当に無いから。覚えているのは、大学の図書館行って、辞典引いて「あ、こういう国なんだ」というのを一生懸命纏めて、その当時画面が一行しかないワープロにそれを一生懸命打ち込んで、発表するんですけど、自分が学生ボランティアやっていた時、アフリカすごく詳しい方が多かったので、自分としては120%の力で(発表を)やったつ

もりが、メッチャだめ出しが入るんですよ。「そうじゃない。あなたちゃんと調べたのか?」とか言われて、その当時すごい負けん気が強かったのでチクショーって思って、一生懸命さらに調べて、次の回とか発表して、またその発表のレポートとかを「もう一つのTE」(「アフリカと踊ろう」の事です)に載せなきゃいけないんですけど、結構またそれでワープロをパーツと打ったり、というのが本当に大変でしたけど、すごい勉強にはなりましたね。

石川：それってボランティアチームのお互い学び合おうっていう会？

栗田：そう、確か外部(一般公開)には出していなかったと思うんだけど。

石川：私、栗田くん、クソカスにスタッフにやり込められてるのは何回か見たことがあるんだけど。あんまり

私がやった記憶がなくて。私がボランティアチームですごい頑張ったっていうのは連続講座。ボランティアチームがアフリカの事業の活動資金を作る。映画でアフリカを伝えようとか、料理でアフリカを伝えようとか、いろんな切り口でアフリカを見ていきましょうという連続講座で、それこそ十何万稼いで、そのアフリカチームの貯金通帳を作ったのもその頃で、ある一定額は事業に寄付する。ある一定額は講師を呼ぶとか、場所借りのお金にするとか、っていうので残してプールして（貯めて）おいて。自分たちで活動やった時は、それこそ今でも覚えているけど、映画会は百人とか来て、いっぱい人が座っているというのは覚えていて、そこでお金を作ったのはすごい大変だったし、楽しかったな。その講師との調整とか、それこそアジア研（アジア経済研究所）とか、ただJVCの名前を使うから、スタッフにも許可をもらって出したらボランティアチームで呼んでもらうんだったら謝礼はいりませんかと言われてたりとか、そういう交渉も、場所取りとかも、自分たちでやったっていうのはすごく思い出に残ってるかな。

今井：何から何まで自分たちでやっていたっていうか、グロフェス、当時の国際協力フェスティバルで、何かアフリカチームで出してたっていうか。中川くんなんか、それやるうちに実行委員会のメンバーになっちゃったりとかして（笑）

中川：石川さんが確かやって、何か楽しそうだなって。僕もやっていすかって。

今井：もちろんJVCの名前だったけど、実質アフリカチームが全部やってたっていうか。

石川：人もいたし力があって、物販に出るチーム、食販で出るチームもありました。割り振られたら自分達でそれこそ看板作りから最初の入りの準備からスタッフに言われるっていうより、スタッフにこうしますって伝えて当日全部やってたね。

中川：やりましたね。

今井：国フェス（国際協力フェスティバル）覚えているのが、俺がやった年にエチオピアの何かを作ったんだよね。それを作ったのがすごい大変だったのは覚

えていませんか？

栗田：コーヒーポット？

石川：ウンスラーだよ。水瓶作ってさ。

栗田：水瓶か。それを持ってもらおうと企画をやったんだっけ。

石川：そうそう。確か、重いけど、背負ってもらおうって、やったんだよね。

栗田：土粘土で作りましたよね。絵の具塗ったりとか。

今井：そうそうそう。

中川：前に一回言われたのが、何したらいいですかって聞いたら、あなた何しに来たのって言われた人がいるって。何かしたいからここに来たんでしょって。何かしたければどうぞやってください。でもあなた責任持ってやりなさいよって、そういう雰囲気がありましたね。あと当時はまだNGOっていうのはそんなになかったっていう記憶があるので、若い人がボランティアしようとする結構JVCに来ていたのになって気はします。今はNGO増えたので分散しちゃっているのかなって、まあ、個人的な感想です。

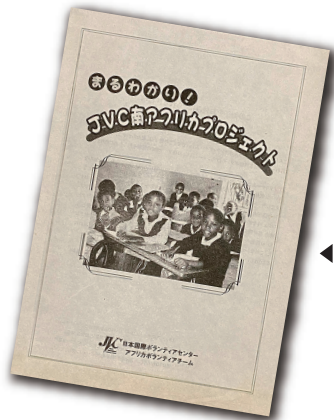
数人：ああ。

今井：当時よく覚えているのが壽賀さん（元JVCスタッフ エチオピア担当）が「ボランティアのためのボランティアはしない」って言ったこと。

全員：ああ。

今井：その言葉はよく覚えているよね。スタッフがボランティアのために「はい、これどうですか？」っていうことはしないから、やりなさいって。はつきりしてましたよね。やはりよく怒られてましたよね、スタッフに。色んな事で。

栗田：ホント怒られて、火曜日来るのが苦痛だった時もありますね（笑）あの当時E-mailもないから休んでも連絡来ないはずなのに、なんかすごい行かないやっていう気持ちがあって、例えば発表の日とか、またクソミソに言われるんだろうなって思いながら、いや、でも、ここで負けたらっていう感じもあって、あとは楽しくやりたいなっていう。あの当時情報を仕入れるのがすごく難しかったから、NGO来たらスタッフさんの話とか聞けるから、それも自分が行くモチベーションになったかなって思いますね。



◀まるわかり講座の冊子。
当時はワープロで
切り貼りしていました。

小河原：帰国報告会も結構やってて。

石川：ああ、そうだね。それ毎回ボランティアチームの仕事だったね。

小河原：そうだね。告知とかセッティングとか。

今井：渡辺さん（アフリカチーム担当のJVC職員）が、まるわかり講座のチラシを（オンライン上で）送ってくださいましたね。

中川：ああ、紛争（の講座）ね。覚えていますよ。若い人たちが一生懸命頑張ったの覚えています。えっとね～黒須とかそんな人たちがいたのを覚えています。あとラジオDJやっている子。

石川：はいはいはい。

中川：その2人が頑張った記憶はある。

今井：すごいよね講師陣も。

石川：あっ、武内さんが、無料で来るボランティアチームでアフリカの事を自分たちが研究するのは、そういう事を伝えるためでもあるので、そういう場を作ってくれて、お金はいらないって。あっ、映画『ホテル・ルワンダ』か。すごいね講師も。

栗田：毎週やったんですね、これ。

中川：結構しんどかったですね。確か。

今井：こんなことやっていたなんて知らなかったな。俺がスーダンに赴任した時期なんだけど。こういうことやっていたんだ。

中村：担当、渡辺さんと石川さんになっていますね。文京区のシビックセンターでやったんですね。

中川：確か渡辺さんに講師紹介してもらって、後の折衝とかはアフリカチームでやった記憶がある。

小河原：僕はこの「まるわかり講座」の冊子を作りました。

これは朋ちゃん（石川）も記事を書いているし。分量あってがんばったなって覚えていますね。

中村：それってPDFとかないですよ。

中川：当時は切り貼りとかしてアナログで作ったと思います。

小河原：ワープロを切り貼りしてね。だから創刊号のデータとか無いんですよ。

中村：「アフリカと踊ろう」の話ですよ。

小河原：そうそう。

中村：「アフリカと踊ろう」今回100号達成ということなんですけど100号の間にはこんな企画もあったよとか、こんな面白い記事あったよとか、そういう思い出ってありますか？

小河原：いや、毎年変わらないというか、イベントの記事や帰国報告会の記事とかね。後は自分で勉強したエイズ問題を書いていたということはあるんですけど。後はフリマの結果とかですかね。

中村：フリマの話なんですけど、今はコロナの影響で中断しているのですが、それまでは年に3、4回アフリカチームとして出店していたのですが、もともとは小河原さんが何年くらい前に第1回目をしましたっけ？

小河原：いつかは忘れましたが、明治神宮の駐車場でやったフリーマーケットが最初でした。当時、紳士同盟というのがあって、例えばオースチームは古はがきを集めて、カンボジアチームはテレホンカードを集めるといったようにチーム同士噛み合わない暗黙の了解があったんで、じゃあアフリカチームはフリーマーケットにしようということになりました。

今井：何年くらい？2003年くらい？

小河原：2002年だったっけ？僕が持っていたガンダムのフィギュアが売れに売れちゃって。朋ちゃんが「これ売れるわけ無いじゃない」と言ってたけど。

全員：（笑）

小河原：当時、中古集めようといったとき、朋ちゃんあまり良い顔をしていなかったね。

石川：だってね。小河原君お金無いのにそういうつまらないおもちゃばかり買いあさって、コンビニに一緒

に行ったらおまけ付きばかりさ、それ全部寄付するんだよね。「そんなの誰も買わないよ」って言ったらそれが馬鹿売れして、アイキャッチになってすごい人がアフリカチームのブースに来てくれて、すごい売り上げになったのを今でも覚えていますね。小河原君、ゴメンね。

全員：(笑)

今井：まあいつもアフリカチームのミーティングの時も朋ちゃんが小河原君のことを心配している。

全員：(笑)

中川：心配してコキ使うみたいな。

石川：そう、それがフリマの最初。

中村：フリマね。まあここ数年僕が中心になってやらしてもらったのですが、やっぱり出品王は小河原さんですよ。毎回いろんな物を持ってきてくれて、「え？こんなの売れるの？」って「真冬にそうめん器なんて売れないでしょ」みたいな。

小河原：でも、大きなぬいぐるみは売れましたよね。

中村：(お客さんが) 娘さんにせがまれて、「パパ、あれ買って！」って言われて。それは結構レアケースだと思いますよ。普通かさばるものは持って帰ってこれない。まあフリマはそんな感じで結構長くJVCの後方支援になるのならという事で、モノを寄付してくださる方とか、それを預かって売るっていう。ほんとにボランティアのスタイルとしてね、それを体現しているような活動ってことでしている。なので今も続けられていると思うんですけど、フリマ以外でも活動とかイベント事で面白いことやったよっていうのは何かありましたか？

小河原：あとスタディツアーぐらいかな。僕は南アに行き、黒人の障がい者施設のところを訪問してお手伝いをするっていうのがあって、それに参加しました。

今井：それいつ頃？90何年くらい？

小河原：2002年？津山さん(元JVCスタッフ・現AJF代表)が現地スタッフでいましたね。そこでドゥウちゃんとかに歓迎されて、歌をうたってくれたりとかしてくれましたね。中川くんとかもね。あれ？違ったっけ？

中川：私は卒業旅行で勝手に1人で行ってだけです。

小河原：朋ちゃんもエチオピアに自分で行ったんだっけ？

石川：そうです。ただ、私はボランティアチームで1回エチオピアのスタディツアーを企画していて、私以外の4人は行ったんですよ。99年か、98年か。私はその5人で企画して、色々現地ともやり取りしてたのに、会社の許可が出なくて行けなくて。獅子君はじめ、何人かエチオピアに行ったんです。ボランティアチームの良い所って、スタッフと距離が近かったり、現地のスタッフが帰ってきた時には必ず一時帰国報告会の場所や日程調整をボランティアチームがしたりして、現地のスタッフとも仲良くなれて面識ができたりして。中川君もそうだったと思うけど、卒業旅行に行きたいとかスタディツアーで現場見たいって言っても、スタッフも受け入れてくれるという土壌ができて、すごく良い交流になってたと思います。スタッフが来日した時に報告会やったり、直接話す事も。さっき出てた津山さんとか現地のスタッフが来た時にもボランティアチームってすごく近いところで交流ができて。直接話を聞けたり、いい経験もさせてもらってましたね。

中川：そうですね、スタディツアーもやりたいんなら自分で企画すればって感じです。

石川：絶対NGな期間は言ってもらって。やり取り出来たっていうのはありますね。

今井：オフィシャルにJVCが企画するスタディツアーっていうのではなくて、自主的にやるスタディツアーだよ。昔は団体がやるスタディツアーも今は旅行業法で、法律で規制があるので。

小河原：僕が南アフリカに行った時も道祖神(旅行代理店名)が企画をしている体でJVCを訪問するっていう形だったから。

今井：私は2000年に南アフリカにスタディツアーで行ったんですけども、それがJVC主催企画は最後だったかもしれない。

その3に続く